ヒカルの碁　～虎次郎が現代（ヒカルの語の世界）に転生！？～

メテオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒカルの碁　～虎次郎が現代（ヒカルの語の世界）に転生！？～

【Ｎコード】

Ｎ４８９４Ｙ

【作者名】

メテオ

【あらすじ】

虎次郎が現世に転生して、囲碁をするヒカルの碁の二次創作です

第1話　永久のライバル

『佐為、もっと打たせてやれなくてゴメンな』
『いえ、私は十分に打ちました。私は後世に蘇るかもしれません。そのときは、神様に頼んで、そのときによみがえってください』
『その手があったか。分かった。そうするよ』
『安心してお眠りなさい。また、会いましょう・・・・・・』

～真っ白い部屋～
「ここは・・・あれ？俺は死んだはずだ。でも・・・どうして・・・・」

「ここは転生の間。死んだ者がよみがえるための場所です」
「ある程度の希望なら聞くことが出来ます。どうしますか？」

「はい。じゃあ佐為が次に現世によみがえる時に転生させてください」
「できれば佐為が取り憑く人の兄弟か幼馴染にしてください」
「後は佐為を見えるようにしてください」

「分かりました。その程度の希望なら聞くことが出来ます。それでよろしいですね？」

「はい」

「分かりました。では、その扉を通りなさい。そうすれば来世によみがえります」

「ああ、流石に恥ずかしいと思うので記憶を取り戻すのは5歳のときにしておきますね」

「ありがとうございます」

～12歳の時（？）原作開始～

「走れアカリ、唯斗」

「じいちゃんちはすぐそこだ」

「そうだけどこんな日に行くか？」

「も～そんなこと言ってないで早く行こうよ！！早く屋根のあるところ」

「そうだな」

「っていうかまっすぐ帰ろうって言ったのに～」

「じいちゃ～ん。じいちゃん？あがらせてもらうよ～」

「ねぇ・・・ほんとにいいの？」

「そうだよな。怒られても知らんぞ？」

「大丈夫だってw」

「あ～どれもぱっとしないな～」

「ヒカル～もう出ようよ～気味悪いよ～」

「勝手にそんな事していいの？」

「こないだの社会のテストで８点しか取れなくてさ～小遣いとめられてるんだ～・・・」

「おっこれなんか良いんじゃね～か？」

ういしょっと

「これ知ってる～五目並べする台でしょ？」

「そうだけど、名前は碁盤だよ？」

「そうなんだ～」

「かなり古そうだな～」

「じいちゃんが昔使ってた奴かな～」

「こりゃ高値で売れるかもな」

「ねぇ・・・ほんとに良いの？」「なあ、ほんとにしらんぞ？」

「平気平気。きっとじいちゃんだって忘れてるよ。それにこっちだってほこりとってやりゃあ・・・」

「それにしても全然落ちないぞ？この汚れ」
「汚れてなんかいないよ？きれいじゃない」
「これ」
「どこ？」
「ここ」
「え？何にも無いよ？どこ？」
「あるとしたら他のところより汚いだけだぞ？」
「ここだってば」
『見えるのですか』
「だからさっきからそういって」
『私の声が聞こえるのですか』
『私の声が聞こえるのですね』
「やっぱりそんな跡なんて・・・」
「誰だ！」
「やだ、ひかる変なこと言わないでよ」

『みつけた！やっと見つけた』

「どこだ？」

『あまめく神感謝します』

『私は、私は今一時現世によみがえる』

「どうしたの？ヒカル？」

「義祖父さん！ひかるが大変だよ！！」

～救急車内もしくはヒカルの心の中～

「だれだ？お前は」

『藤原佐為』

「佐為？」

「何者だ？」

「平安の都で大君に囲碁を教えてたが、大君への指南役は一人で十分だともう一人の指南役が言い、大局で決めることになったが、相手のイカサマで負けて、自分はイカサマをしていないのに相手にイカサマをしたと言われて、負けて、都を追い出されて死んだ人の霊だよ」

「なぜそなたがしっているのですか？まさか！」

「そうだよ。久しぶり、佐為」

「え～っと・・・なんで佐為と唯斗が知り合いなの！？」

「転生って知ってるだろ？「ああ」それをしたんだ。俺は」

「へ～そうなんだ」

「俺の転生前の名は虎次郎。後に改名して策秀という名前になったんだ」

「そうなんだ」

「まあ３４で死んだけどなｗ」

「多分碁盤についてた血は俺のものだと思う」

「それで、俺に乗り移ったのはまた碁が打ちたいってことだよな」

「はい。なぜなら私はまだ神の一手を極めていない」

～翌日～

「ひかる～お前昨日救急車乗ったんだって？」

「ん？ああ」

「ひかる？」

「ヒカル、ほんとに大丈夫？」

「大丈夫だって」

「はい！はじめてください」

『お～歴史の問題ですか』

『昨日のあれは夢じゃなかったんだよな』

『はい』

『で、お前の名前なんてったっけ』

『佐為です』

『佐為か～』

『お前そんなに碁が好き？』

『はい』

『まだ碁が打ちたい？』

『はい』

『でも悪いな～俺碁なんてぜ～んぜんやる気無いから』

うぇ・・・

「ひかる？大丈夫？」

「ああ、もう平気」

『お前なにしたんだ』

『何もしてません。ただ、もう碁が打てないという私の悲しみがあなたに乗り移っただけです』

『たくぅ～千年に及ぶお前の執念には舌を巻くぜ』

『でもな～俺には俺の人生設計があるんだ』

『なぁ～俺以外の奴じゃ駄目なの？乗り移るの』

『多分』

『はぁ・・・・・・』

『分かったよ。たまに打つぐらいならいいよ』

『けど、俺の心は俺のものだからな』

『勝手に話しかけてくるな』

『はい！』

『なあ、佐為。ペリー知ってる？』

『ペリー？』

『ペリーだよ。黒船率いてやってきたペリー提督』

『それでそのペリー提督はどこに着たんだ？』

『浦賀です。あの時は大騒ぎでした』

『浦賀っと』

『佐為』

『はい』

『お前って結構使える奴だな』

「進藤君、もうテストは出来た？」

「もうちょっとです」

「がんばってね」

『人の体を通り抜けておきながら謝りもしない等無礼な。ひかる。この時代の女性は皆』

『分かった分かった。そう頭の中で北斗と一緒に碁が打てる場所に連れて行ってあげるから』

『わ～凄い人ですね～』

『天下の大東京だからな』

『あ、佐為、江戸のことだからな。東京は』

『それでそれで。どこで碁を打つんですか？』

『ごかいじょ』

『じいちゃんが時々行ってるんだけど、物好きな親父たちが集まって碁を打つ場所があるんだと』

『いつの時代でも囲碁を愛する人はいるんですね』

「あら、こんにちは。どうぞ」

「あの～君たちここ初めて？」

「「はい」」

「誰でも打てるの？」

「打てるわよ」

「じゃあ名前書いて」

「棋力はどれぐらい？」

「棋力？」

「碁の強さのことだよ」

「すみません。俺はコンピューター相手にしかやったことが無いので・・・」

「俺は碁自体やったことが無いんです」

「えっと、ひょっとしてあの僕たちと同年代位の人って塔矢名人の息子さんですか？」

「よく分かったわね。そうよ」

「対局相手を探してるの？」

「はい」

「僕でよかったら打つよ」

「ヒカル。俺が先でいいよな」

「ああ、いいぜ」

北斗『佐為、打っていいぞ』

『本当ですか！ありがとうございます』

「奥へ行こうか」

「あ、ちょっと待って。子供なら五百円よ」

「あ、すみません忘れてました」

「今日始めてここに来たんだからサービスしてあげてよ」

「う～ん。アキラ君がそういうなら」

「僕は塔矢アキラ。君は？」

「俺は進藤北斗。六年だ。あ、北斗でいいよ」

「僕も六年だよ。あ、僕もアキラでいいよ」

「棋力はどの位？」

「コンピューター相手にしかやったことが無いからわかんないw」

「あはは。まあとりあえず置石は４つか５つぐらいにしようか」

「ああ、置石ならいいよ。アキラにどの位通用するか知りたいし」

「あはは、いいよ。先手はどうぞ」

「ああ、分かった」

『佐為、言わないのなら俺が勝手にやるぞ？』

『ああ、待ってください。言います言いますから』

『あ、でも互角ぐらいにしてよな。指導碁はなしで』

『分かりましたよ』

『虎次郎、行きますよ』

『ああ！』

キングクリムゾン

え？対局を書け？無理ですよ

「おい、見ろよ塔矢アキラ相手に互角だぞ」

「すげーじゃんあいつ」

「くっ・・・ありません」

「え？ほぼ互角！？そんな馬鹿な！！」

「え？あの子アキラ君相手にほぼ互角なの！？」

「何目差だ？」

「一目さだよ」

「まさか・・・アキラ君はプロに近い実力なのよ！？ってことはこの子も！！」

「ねえ、コンピューター相手にって言ってたけどそのコンピューターってどんなの？」

「え～っと・・・棋院にある中でも結構難しい奴だったはずです」

「へぇ～そうなんだ」

「何回コンピューター相手にやってたの？」

「１０万回はやったと思いますね。５歳の頃からやっているので」

「じゅ、十万・・・僕でさえ一万回なのに」

「まあ、俺は一日のほとんど碁をやってるから」

「まあ、ともかく。これからもよろしく」

「ああ、こちらこそよろしく」

第1話　永久のライバル（後書き）

次のアキラ対ヒカルですが、原作と同じですので省略します

見たい人はようつべで見てくださいw

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4894y/

ヒカルの碁　～虎次郎が現代（ヒカルの語の世界）に転生！？～

2011年11月17日19時28分発行